

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520085

研究課題名(和文) コンディヤックとボネに見る感覚から知性への発展 - 感覚論哲学比較研究 -

研究課題名(英文) Development of the human mind from sensation to knowledge, from the viewpoints of Condillac and Bonnet -- Comparative study of sensationalism --

研究代表者

飯野 和夫 (IINO, Kazuo)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：30212715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： コンディヤックとボネという18世紀の二人の代表的感覚論者が、人間の感覚から知性が発展する過程を分析した内容を比較検討した。そのために、まずコンディヤックの感覚論が変遷を遂げた経緯を跡づけた。次いで、コンディヤックは知性の発展には記号の働きが重要な役割を果たすと考えていたので、彼の記号概念の特質についての研究を行った。一方、博物学者でもあったボネは生理学的視点を取り入れ、脳の神経繊維が網状組織を形成すると想定した。このように両者の探求の特徴を明らかにしつつ、二人の思想の比較研究を進めた。また、パリとジュネーブで調査を行い、特にコンディヤックによる『人間知識起源論』の改訂のあり方を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： Condillac and Bonnet, two representative sensationalists of the 18th century, analyzed the process in which human understanding develops from sensation. I compared and examined their thoughts. At first I traced the process in which Condillac's sensationalism undergoes changes. As Condillac thought that the function of signs played an important role in human intellectual development, I studied characteristics of his sign concept. On the other hand, Bonnet, who was also a naturalist, adopted a physiological viewpoint and assumed that cerebral nerve fibre forming a meshwork underlay intellectual function. I clarified in this way the characteristics of their conceptualizations and advanced a comparative study of the thoughts of the two people. I went twice to Paris and Geneva for investigation and clarified in particular the process in which Condillac had revised his "Essay on the Origin of Human Knowledge".

研究分野：思想史

キーワード：感覚論 コンディヤック 知性 記号 ボネ デリダ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的な背景、すなわち国内・国外の研究動向と、その中での本研究の位置づけは以下のものである。

感覚論哲学は、十八世紀から十九世紀初頭にかけてフランスさらには西欧の思想界を代表する思潮であった。それは現代の視点から見ても重要な問題をはらんでいる。感覚論を代表するのはコンディヤック(1715-1780)とシャルル・ボネ(1720-1793)であるが、両者について、今日ではフランスを中心として専門的な学術研究が充実しつつある。一方、日本では、コンディヤックについては研究が徐々に蓄積されてきている。シャルル・ボネについては報告者自身が研究を進めてきている。とはいえ、この二人の思想を比較しつつ感覚論哲学を総合的に理解しようとする研究は国内にはいまだ存在しない。この点は国外でも似た状況である。本研究はこの空隙を埋めようとするものである。

一般に、西欧の十八世紀思想は現代の多くの思想家に刺激や靈感を与え、彼らの考察の対象となっている。特に現代フランスの代表的哲学者ジャック・デリダはコンディヤックを本格的に論じている。しかし、デリダとコンディヤックの関係についての研究は、国外・国内ともほとんど存在しない。本研究では、デリダによるコンディヤック解釈をも検討する。これはデリダの斬新な視点を取り入れて感覚論哲学を捉え直すことであるとともに、デリダ研究にも新たな寄与をなすものとなる。

次に、報告者個人がこれまでに行ってきた研究と本研究の関係は以下のものである。報告者は、大学院修士課程以来ボネについての研究を継続している。1987年にパリ第一大学に提出した哲学史の博士論文もボネを対象としたものである。従って、ボネについては、コンディヤックとの比較研究を行うために必要な準備段階の研究をすでに終えている。一方、報告者は、コンディヤックについても、1995年に研究論文を発表して以来、研究を継続している。2006年にはデリダのコンディヤック論である『たわいなさの考古学』を人文書院から翻訳出版し、報告者自身のコンディヤック研究にもデリダの観点を取り込んできた。報告者によるこうした感覚論研究の、本研究開始時点での到達点は以下のものである。

報告者はまず、『デリダのコンディヤック読解 - 自同性の問題を中心に -』(2009年3月)において、デリダとコンディヤックの思想上の接点を検討した。デリダのコンディヤック論の中心は自同性の概念にかかわるが、コンディヤック自身はこの概念をまとめて論じてはいない。そこで、報告者はコンディヤックの自同性をめぐる議論を再構成して提示しようとした。

コンディヤックは、諸真理は、総体として

は「一つの同じもの」(自同的なもの)であり、新しい真理の発見は、この自同的な真理の体系を細部において展開することである、と考えた。この最初の真理の体系の位置に「感覚」の働きがある。この感覚は、一方で、知性の働きに姿を変えていく。その知性は、自らの母体である感覚が有する諸関係を探り、活用していくことになる。コンディヤックは、言語記号の働きが知性の働きを飛躍させるとした。ただし、彼は同時に、記号の使用はたわいなさに陥る可能性も秘めていると鋭く指摘した。こうした記号の両面的な性格についての、コンディヤックの、現代思想にも通じる鋭い指摘を浮かび上がらせたことは、デリダの独創的な業績であった。

報告者は次いで、論文『コンディヤックの動的人間観--欲求の理論とその展開--』(2012年3月)において、コンディヤックが『感覚論』(1754)、『動物論』(1755)などの著作において、人間の精神活動の極めて動的な理解に到達していたことを、デリダも参考にした。

人間のもつ欲求や欲望、あるいはいわゆる感情の働きについての『感覚論』の議論を踏づけた結果見えてきたことは、『感覚論』の一見静止的、幾何学的な印象とはうらはらに、コンディヤックが人間の実相に迫ろうと苦心し、また実際に人間精神の動的な姿を照らし出すに至ったことである。

『感覚論』は、人間の知性が発展する以前の、欲求、欲望、感情、意志、実践的知性などの働きを扱っている。コンディヤックはこの『感覚論』において、人間の欲望に「念入りな選択」という上位の精神作用がかかわる可能性を指摘した。また、<精神的な快・不快>にかかわる欲求・欲望も問題にした。これを受けて、続く『動物論』では、次のような内容が展開される。人間が知ることになった精神的な快・不快の感情は、社会の中で絶えず繰り返される。それに対応して人間は新しい種類の知的な欲望を絶えず生じさせるようになる。そして、人間はついにはこの種の知的な欲望を「必要なもの」とし、「欲望することへの欲求」を抱くに至る。この「欲望することへの欲求」は人間においてのみ獲得される精神の地平に属している。この知的な欲望は増殖することをやめない。こうしてコンディヤックは、欲望すること自体を楽しむ人間という、極めて動的な人間観に到達するのである。十八世紀中葉のこの時期に、文学的方法によらず哲学的方法を用いて人間精神のダイナミックなあり方を描き出しえたことは特筆に値しよう。

なお、本論文では注において、コンディヤックの欲求論、感情論の場面でも、デリダが的確な視点を提示していることを指摘した。

以上に見たように、報告者はボネとコンディヤックについての研究成果を蓄積してき

た。とりわけコンディヤックについては、現代思想の観点も取り入れて研究を進めてきた。

## 2. 研究の目的

ここまでに見たような、学会の動向、そして個人的な研究の蓄積を背景として、本研究の具体的目的は、コンディヤックとボネの思想を比較検討して感覚論哲学の特質を把握し、感覚論哲学の総合的研究の第一歩とすることである。その際、<感覚からの知性の発生>と考えられた過程を中心に考察することである。また、感覚論を現代思想の観点から捉え直すことである。

## 3. 研究の方法

本研究においては、上に掲げた具体的な目的のために、以下のように研究を実行する予定を立てた。

コンディヤックとボネそれぞれが感覚論に基づいて展開した人間精神の考察を、相互に比較しつつ研究する。具体的には、コンディヤックの『人間知識起源論』(1746)、『感覚論』(1754)とボネの『心理学論考』(1754)、『精神能力分析論』(1760)を扱い、感覚からの知性の発生過程の分析を中心に据える。内容的比較とともに、ボネが残した『自伝』などを資料に、相互の影響関係についても調査検討する。

この研究の過程では、現代の最も著名な哲学者の一人であるデリダによるコンディヤック哲学の分析を参考にし、十八世紀感覚論哲学に対する申請者なりの新たな分析の視点を確立を目指す。

## 4. 研究成果

上に具体的な目的として掲げた点についての研究成果は以下の通りである。

### <1> 感覚論哲学研究

感覚論哲学の研究それ自体としては、報告者はまず、論文「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描 - - 『人間知識起源論』の出版後間もない改訂に関連して」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXXV巻第1号, pp.3-31, 2013年11月)を発表した。この論文においては、まず、コンディヤックの『人間知識起源論』(以下『起源論』)における、人間知性の発展、およびその発展過程での記号の役割にかかわる論述を分析した。

コンディヤックは、『起源論』第1篇第11部で「人間の魂の働きの生成過程」を跡づけている。すなわち、人は、(1) 観念相互の連関を人為的記号の助けを借りて拡充させ、(2) 理性と呼ばれるものを獲得するに至るとされる。なお、理性は「私たちの魂のさまざまな働きを調整する仕方についての知識」であるとされる。この部分では、記号の使用

から新たに生まれてくる観念連関が、人間の知性が発展する原理として確認される。人は、たやすく扱うことのできる記号を媒介として、魂の高次の働きを「自在に」操作できるとされる。

ここで「魂のいろいろな働き」は概略次のような順序で生成するとされている。観念連関 想像の成立 人為的記号と記憶の成立 想像の自在の行使 反省(または注意の自在な使用) 比較など 分析・判断・推論 概念化 知性 理性。

さて、コンディヤックは『起源論』の初版刊行後すぐ、今見た第1篇第11部の最終章である第XI章の末尾部分にあたる§107と§108(これらのパラグラフ番号は第11部第1章からの通し番号)に改訂を施したことが知られている。

改訂の内容だが、初版では§107に加えて§108が存在するのに対して、改訂版では§107の後半が書き換えられて拡大され、初版にあった§108は削除される。初版の§108では、人間の魂の低次の能力と高次の能力が、知識の素材と活用の役割を持つものとして対比されていた。しかし、この対比は、より重要な補足に場所をゆずることになる。

改訂後の§107の冒頭部分は初版と共通だが、この部分でコンディヤックは、上に見た『起源論』第1篇第11部の全体の内容(最終の第XI章での「理性、機知」の生成まで)の大枠をごく簡単に提示している。また、観念連関の原理とそれにかかわる記号の重要性があらためて示唆される。

改訂版はこの後、広く魂の高次の諸機能に言及する。初版との共通部分に続けて、直ちに理性という魂の高次の機能と、新たな反省としてのその具体的な働きが語られる。次いで、こうした魂の高次の働きと、これまでと同じ観念連関という原理から、別のさまざまな高次の働きが派生するとされる。魂の高次の働きはそれまでも言及されてきた。しかし、それまでは低次の働きから高次の働きが生成する場面に焦点が当てられていた。一方、ここでは、理性が一度生成し、新たな反省が行使された後に、ほかの高次の働きが派生する新たな道筋が提示されている。

この新たな道筋は、具体的には次のようにまとめることができる。(観念連関 知性) 理性 [新たな]反省(あるいは制御できる注意) [新たな]観念連関と[新たな]記憶 分析 制御できる想像 制御できる記憶 概念化(知性 理性)。

ここでは、理性とその下での反省を新たな出発点として、新たな概念化の地平が語られていると言えるだろう。

報告者は次いで、論文「コンディヤックの記号概念 - 松永澄夫氏のコンディヤック関係二論文によせて」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXXVI巻第2号, pp.3-22, 2015年2月)を発表し

た。

『起源論』におけるコンディヤックは、人間の認識能力の発展を跡づけ、その可能性を示すことに関心を寄せている。彼はまず、人間の精神の働きの原理として観念相互の連関を確認する。次いで、彼が目にするのは、人が意のままにできる記憶とそこで働く記号である。人為的に設定された記号を人は容易に、「意のままに」操作できる。人は、欲求にもとづいてこの「意のままになる記号」を用い、その記号の作用を介して他の記号や状況を呼び起こし(記憶)、さらには記号に結びついた観念をも呼び出すのである。コンディヤックは、この人為的記号の出現を説明しようとして、他者との交わりの中で自然的記号が人為的記号に転換するとした。

さて、記号としての名前の働きについて言えば、それは知覚や観念の連関を表すことによって、同様の連関が確認されるあらゆる複合した知覚や観念に結びつくことができる。かくて名前は一般的なものの担い手になる。言い換えれば、複合観念においては多様な諸観念が記号(名前)の助けで結びついているが、集められたものには秩序があり、この秩序を指示することが記号の役割なのではないか。

なお、記号と結びついた、一般性を帯びた観念は、実在の事物を「表象」しているという意識を伴うであろう。

記号は観念の記憶・保存を可能にする。そして、人はさらに「新しい記号を案出」することで、観念そして知識の拡張、体系化を進めていくのではなかろうか。この新しい記号を案出することは、新しい複合観念を生み出すことでもあり、諸観念の新しい連関を生み出すことでもあろう。「この観念の連関は記号の使用によって生じる」のである(『起源論』I-II-XI-107)。結局、人は記号を用いることによって、意のままに知識の体系化を進めていくことができよう。総じて記号が人間の認識を可能にするとと言えるであろう。

コンディヤックの記号論は、『起源論』以後の著作においても展開される。コンディヤックが十分自覚していたかどうかは検証が必要であろうが、『起源論』における記号論の不十分性を乗り越えようとする努力が、『論理学』などの後の著作でなされることになる。この点の検討は、機会をあらためて行う予定である。

これら二論文の執筆を通して、感覚論哲学において感覚から知性への発展過程がどう分析されたかを跡づけるという本研究の課題が、コンディヤックについてはかなりの部分果たすことができたと考える。

一方、報告者はボネの感覚論についても、感覚から知性への発展過程がどう分析されているかについて研究を蓄積してきている。博物学者でもあったボネは生理学的視点を

取り入れ、脳の神経繊維が網状組織を形成し、それが知性の基盤を形成していると想定していた。

報告者は現在、このようにコンディヤックとボネの感覚論思想のそれぞれの特徴を明らかにしつつ、二人の思想の比較研究を続けている。この比較研究を補強するために二人の実生活上の関係を、ボネが残した『自伝』などを資料として検討する作業も開始している。ただし、これらの成果を論文化するまでには至らなかった。今後、本研究の成果として、すみやかに論文を発表していきたいと考えている。

なお、感覚論哲学研究を進めるための資料収集のために、報告者は2012年度と2013年度にフランスとスイスへの調査旅行を行った。

2回の調査旅行の目的は、一つには、上にふれた『人間知識起源論』の内容の組み換えに関連して、著者の生前から19世紀にかけて出版されたこの著作の版による内容の異同を、各地の図書館の蔵書で確認することであった。この調査は2011年から開始したが、今回の2回の調査では、ローザンヌ大学図書館とグルノーブル大学図書館で調査を行った。この著作の初版(1746年刊)にすでに改訂前と改訂後の二つのバージョンがあること、改訂前のバージョンもその後発行され続けたことはすでに2011年の時点で確認していた。本研究期間中の2013年3月には、ローザンヌ大学で改訂後のバージョンを5冊、改訂前のバージョンを2冊確認し、2014年2月にはグルノーブル大学で改訂後のバージョンを3冊、改訂前のバージョンを1冊、確認できた。

2回の調査旅行の第二の目的は、ジュネーヴ公立図書館でボネの手稿類を調査することであり、2013年3月と2014年2月に予定通り調査を行った。この調査の結果はいまだ論文に反映できていないが、今後コンディヤックの思想との比較研究において活用していきたい。

#### <2> 現代思想の観点からの感覚論哲学の捉え直し

「2. 研究の目的」欄では具体的な目的として、感覚論を現代思想の観点から捉え直すことも挙げた。これは、特にコンディヤックの感覚論を検討する中で随時行った。デリダは、コンディヤックの哲学を論じる際に、現代思想において記号、目的論、「事後性」などについて探究された成果を援用している。このようにコンディヤック思想を分析するに当たって現代思想の諸概念を有効に用いることができるということは、翻ってコンディヤック思想そのものの斬新さ、現代性を示していると思われる。

報告者は本研究の中で可能な限りの努力

をしてきたが、「研究の目的」の達成度については当初の見込み通りには進まなかった。

先に挙げた論文「コンディヤックの記号概念」には、続編となる論文を準備中であり、すでにかかなりの部分が完成しているものの、平成 26 年度内の発表には至らなかった。

コンディヤックとボネの関係についての研究はいまだ不十分な状態にとどまっている。二人の実際の関係を扱う論文「ボネの『自伝』に見るコンディヤックとの関係について」(仮題)の準備を進めているが、完成には至っていない。また、二人の思想面の比較研究もまだ道半ばの状態である。

本研究の進展が当初の予定より遅れた理由は、コンディヤックの思考の変遷が予想以上に複雑であったこと、考察が進むにつれて新たな考察が必要となったこと、などにある。しかし、研究の推進が不可能であると感じたことはないので、今後も、本研究を発展させる形で感覚論哲学研究を継続していく予定である。

本研究を今後さらに追求していくための方策は次のように考えている。

上にふれた論文「コンディヤックの記号概念」の続編はすでにかかなりの部分が完成しているので、平成 27 年度中に発表する。また、コンディヤックとボネとの比較研究の遂行に拍車をかける予定である。その際、感覚論の要点でもあり、本研究の課題でもあった、感覚から知性への発展の跡付けを研究の中心として維持していくつもりである。研究の継続に当たっては、これまで同様、現代思想の知見も取り入れ、感覚論全体の現代に通じる意義をも究明したいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

飯野和夫、初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描 『人間知識起源論』の出版後間もない改訂に関連して、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第 35 巻第 1 号、査読無、pp.3-31、2013 年 11 月

飯野和夫、コンディヤックの記号概念 松永澄夫氏のコンディヤック関係二論文によせて、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第 36 巻第 2 号、査読無、pp.3-22、2015 年 2 月

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

飯野 和夫 (IINO KAZUO)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号：30212715

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし